

## 研究発表要旨

### テューダー朝の **Ladies in waiting**

山木 聖史

イングランド史においては、ノルマン朝のウィリアム1世の王妃マチルダにも、ヘンリー1世の妻マチルダにも、プランタジネット朝ヘンリー2世の妻エレノアにも **Ladies in waiting** という侍女たちが近侍していた記録がある。特にテューダー朝のヘンリー8世の治世に入ると、王妃を取り巻いていた影の存在であった彼女たちが表に現れる。キャサリン妃の侍女であったアン・ブリンやそれに続く、ジェイ・シーモアからキャサリン・パーにいたる侍女から王妃になった女性たちである。本発表では、**Ladies in waiting** はどのような身分の女性たちから選ばれて、どのような待遇を受け、宮廷ではどのような仕事をしていたのかを確認する。特にテューダー朝のヘンリー8世は男子の後継者欲しさに次々と王妃を捨てては新しい妻を娶ったことは有名であるが、彼女たちがイングランド宮廷の王妃の **Ladies in waiting** に選ばれた後、歴史の表舞台に現れて、歴史から見てどのような役割を果たしたのかを論ずるのが目的である。

### ミス・ブロウディにとっての「青春」——なぜサンディはミス・ブロウディへの追悼と悔悟の念を同時に示すのか？

加藤 良浩

『ミス・ブロウディの青春』(1961) は、ミュリエル・スパークの代表作の一つと見なされている作品である。サンディがミス・ブロウディを裏切ったのは、「自分を神の摂理(Providence) だと見なし」意のままに相手を操ることができると考えているかに見えるミス・ブロウディに制裁を加え、さらなる被害を防ぐためであった。だが、それにもかかわらず、カトリックの尼僧になって過ごす修道院で、訪問者から「あなたが最も影響を受けたのは何でしたか」と問われるたびに、彼女は、「まるで薄暗い面会室から外に逃げ出したいかのように、格子をしっかりと握りしめながら」、「ジーン・ブロウディ先生という方です。最良の時である青春を過ごしていた頃の」(Miss Brodie in her prime) と答えている。このように、ミス・ブロウディを回顧するとき、彼女への追悼の念とともに、不安と罪悪感すら抱いているかのような様子をきまって示すのはなぜだろうか。発表では、作品の表題にもなっている

「青春」という言葉が作品中で使われる多義的な意味に着目することを通して、この疑問に答えることにしたい。

### シンポジウム要旨

#### 連続シンポジウム「学問的知見を英語教育に活かす」趣旨

連続シンポジウム発起人 鶴崎 敏彦

学会の存在意義の一つに社会貢献があることは論を俟たない。そして、当学会が守備範囲としている諸分野の研究活動を社会に還元する有効な手段の一つに、その研究成果の英語教育への応用が挙げられることも、多くが認めるところだろう。そこで、最近の英語教育の動向に目を向けてみると、コミュニケーション能力が重要視されており、とにかく「慣れる」ことで英語力を育成しようとする傾向にあるようだ。もちろん、「慣れる」ことは大切であるし、英語をツールとして使えるようにならなければ、学習する意味がないのも当然である。

しかし、限られた時間の中で効率よく英語力を身に付けるためには、「慣れる」だけではなく、きちんと「理解」することも重要であることは間違いない。その「理解」を促す過程で、最新の研究成果はもちろんのこと、概論レベルの知識であっても、授業者の工夫次第で、学問的知見を活かすことは十分に可能であると考えている。本シンポジウムでは、「学問的知見を英語教育に活かす」というテーマのもと、各発表者が、各々の専門分野における英語教育に活かすことのできる学問的知見や、その知見を活かした教授法について取り上げる。

#### 発題者 24 5 ラウンドシステムにおける文法指導を考える—意味順の可能性と英語学との関連—

北島 翔汰

5 ラウンドシステムとは、横浜市立南高等学校附属中学校で始まった、同じ教科書の内容を年間に 4~5 回繰り返し学習することで、英語力の定着を図る英語教育法である。授業は音声理解から始まり、最終的にはリテリングへと発展し、年間を通してコミュニケーションに構成されている点が特徴である。このシステムは、これまでにも成果を上げてきた一方、文法指導に関しては課題が残っており、文法事項の体系的な整理や指導が十分に行われていない場合も多い。

そこで本発表では、田地野（2011）による意味順 Box（図1参照）を活用し、5ラウンドシステムにおける文法指導の可能性を探る。意味順は本来、意味中心の指導法であるが、それぞれの Box を適切に使用することで英文の構造や階層に着目した指導にも応用が可能である。議論を通して、意味順と5ラウンドシステムの相互作用による効果的な文法指導の在り方について考えたい。

（図1）意味順 Box

玉手箱	だれが	する・です	だれ・なに	どこ	いつ

## 発題者 25 鉄道のアナウンス、掲示の英語から学ぶ英文法

野村 忠央

日々の授業の中で文法事項を教える際、どの英語教員も適切な例文を探すことに苦労しているはずである。例文の代表的な出典は教科書、英文法書、構文集などであろう。

しかし、教員も生徒、学生も知らず知らずのうちに毎日、耳にしている英文がある。それは駅や鉄道で流れる英語、ホームや車内に記されている掲示の英語である。これらの英語は必ず日本語の意味も同時に理解しており、英語の文法や語法を理解する恰好の教材、例文となりうる。

本発表では下記のような英語を数多く取り上げ、授業で用いる際にはどのような点に留意すべきかを考察したい。

- (1) Your attention, please. The local train *bound for* Tokyo will soon arrive on track number 2. (be bound for～は「～行き」、be bound to do は「きっと～する」)
- (2) For your safety, please stand *behind* the yellow line. (補語は前置詞句も可能)
- (3) This is the NOZOMI Super Express bound for Tokyo. We *will be stopping* at Kyoto, Nagoya, Shin-Yokohama, and Shinagawa stations before arriving at Tokyo terminal. (意志が関与しない予定や計画を表す未来進行形)
- (4) *Should* you drop something on the tracks, please contact the staff. (可能性の低い未来を表す仮定法の should の倒置は思いの外、使用頻度が高い)